

令和 2 年 10 月 7 日

貴重な標本を救え!! 「令和 2 年 7 月豪雨」で被災した 植物標本レスキュー支援活動について

本学資料研究所は共生システム理工学類黒沢高秀教授のもとで、全国の自然史系博物館・大学とともに、令和 2 年 7 月豪雨により被災した熊本県人吉市の人吉城歴史館所蔵「前原勘次郎植物標本」のレスキューに取り組んでいます。

令和 2 年 7 月豪雨に伴う球磨川氾濫により、人吉城歴史館(人吉市)は浸水被害を受けました。同館は前原勘次郎氏の採集した植物標本を所蔵していますが、この標本も被災しました。

前原勘次郎氏(1890-1975)は、南九州の植物研究史上重要な文献である『南肥植物誌』の著者として知られています。同氏のコレクションはこの文献の貴重な証拠標本であり、新種記載に用いられた可能性のある標本など、植物学的にも重要な標本が多数含まれています。このコレクションの大半がこの度の豪雨で水に浸かり、早急に乾燥・クリーニングを行わなければ腐敗やカビの発生で標本の価値が損なわれるおそれがあります。

そこで、人吉市の依頼により、熊本県及び熊本県博物館ネットワークセンターは、当標本の搬出を決断、水損した標本の数が約 3 万点という膨大な量であることから、迅速な保存処理を行うために、「植物系学芸員メーリングリスト」などを通じ全国の自然史関係機関に協力を依頼しました。これをうけて、国立科学博物館を中心とする全国の 36 自然史系博物館・大学が協働して水損した標本の修復に取り掛かることとなりました。新型コロナウイルス感染症予防のため、現地での支援に入るのが困難な状況の中で、全国の関係機関が連携協力し、分散対応という形でこの貴重な自然史資料のレスキューに取り組んでいます。

この中で、本学資料研究所は、共生システム理工学類黒沢高秀教授を中心に、冷蔵保管に関して共生システム理工学類および環境放射能研究所の協力を得て、8 月 7 日より被災標本の受け入れを始めました。現在までに段ボール箱 10 箱、約 700 枚の標本を引き受けています。これらの標本の修復を進めており、すでに約 300 枚の標本の乾燥を終え、残りの標本の修復に取り掛かっています。熊本県内などにはまだ多くの標本が処理をされずに待っている状況です。手元の標本の処理が終わり次第、そのような標本の追加の引き受けを行う予定です。



図1. 被災の様子。高さ2mある棚が倒れている。浸水した際に浮いて傾いたとみられる。熊本県博物館ネットワークセンター提供。

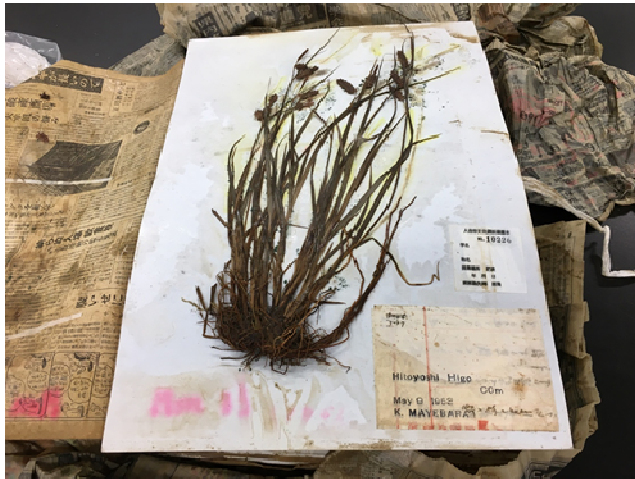


図2. 福島大学に送付された被災標本の一枚。1953年に前原勸次郎が熊本県人吉で採集したゴウソ（カヤツリグサ科）標本が新聞紙に貼り付かないよう不織布を挟むなどの補修等を行い、乾燥処理を行う。



図3. 被災標本の乾燥処理の様子。

（お問い合わせ先）

共生システム理工学類教授 黒沢高秀

電話：024-548-8201

メール：kurosawa@sss.fukushima-u.ac.jp